



オプアートとグラフィティの狭間で

杉山卓朗の作品を一言で述べるとすれば、「オプアートとグラフィティの融合」と言えるであろう。近年、美術界において段階的に進歩して生まれる新しい様式の誕生が望めなくなった。そのため「引用」という名の下に、過去のあらゆる分野の様式を取り込みながら次世代の流れを作り出す方法論が一般化しつつある。やや悲観論と取られざるをえないが、文明の成熟に起因するものが大きく、それは仕方がないことである。そんな中、長谷川祐子氏が昨年の東京都現代美術館での展覧会〈SPACE FOR YOUR FUTURE〉にて現在の美術界の状況を以下のように述べている。「アートは遺伝子組み換えに似ている」と。単一のフィールドに直接かかわりのないものを部分的に内部へ組み込ませることで、化学反応的な変化を引き出す手法である。いまさら彼の作品の中で錯視効果などによる視覚の超越した領域や、サブカルチャルな直感的要素の強いテーマなどを個々に提示しても仕方がない。杉山が両者の融合によって作り出そうとしているものは、まさに遺伝子組み換えの中から突然変異させる要素を見いだす実験そのものではないだろうか。

まず杉山はデジタル的な世界を完全なアナログの手法で作りに固執する。オプアートの時代と異なり、デジタルの存在が大衆化された現在にあって、視覚の不確かさはすでに認められているところである。むしろデジタルという秀逸なツールによって人間の知覚も相対化される傾向のある中で、彼はそれを全否定するかのように、非現実的な3次元絵画を展開していく。あたかもデジタルに抗うようなこの回りくどさに何らかの触媒効果が眠っているはずだ。

そして線と面に対するこだわり。縁取りを多用するグラフィティ・スタイルの手法から見いだしたものであるが、本来の全体を目立たせて「かたち」を形成させる用途ではなく、逆に「かたち」を解体させて、断片に視点を絞らせる効果があるように思える。彼は線と面を使って「かたち」を作っているのではない。「かたちでないかたち」を創造しているのである。共にミクロ的なアプローチと、「逆も真なり」の発想。そこに新しい価値が眠っていると云わんばかりに、杉山は黙々と画面を構築し続ける。

杉山が描き続ける「幾何学的に立体に見える」作品は、現実の3次元世界では明らかに存在しえないものである。あらゆるアンチテーゼを作品の中に織り込んでいくことにより、価値が突然変異する臨界点へと自らを追い込んでいるように思える。また、ミクロの視点では面と線が絡み合っているが、マクロの視点になると面と線がその存在性を失い、杉山の有機的な世界が平面上を覆っていることに気付くのである。まさに遺伝子の染色体を配置しなおすかのように、二つの美術の潮流をルーツに、杉山はそれらの裏側を掘り起こしながら次世代の美術の形成のために、まさに一石を投じようとしているのである。